

気軽に、身近に、農福連携のすそ野を広げたい

一般社団法人 禰農園 たすきファーム（丹波篠山市）



経緯

- ・代表理事の橋元工（はしもとたくみ）さんは、元市役所職員で福祉部署を中心に30年在職。農業の経験はなかったが、市役所職員として地元の特産物である黒豆作りに携わりたいという動機から、市役所の有志職員と約20年間黒豆栽培に取り組む。この取組で児童養護施設の子供たちや、ひきこもりの方々を支援するNPO法人と活動をともしてきた。
- ・子供たちと一緒に農作業をすると、苗を植えながら自然に会話をしたり、土に触れることにより安らぎを感じたり、収穫時の喜びを共有していることに気づき、農業の可能性を知ることになった。
- ・2022年3月、行政を通じてではなく直接自らが実践者として福祉現場で関わりたいという思いから、市役所を退職。1年間大規模農家の元で農業を学び、2023年4月、就労継続支援B型事業所「たすきファーム」を開所。

取組内容

- ・農家から借り受けた45aの農地で黒豆を中心に、山の芋、野菜を栽培・販売するほか、黒豆ベーグルを中心に8種類のベーグルを製造・販売。また、生産組合から草刈り作業を受託。
- ・利用者は自然があふれ、ゆったりと時間が流れる環境の中で、リラックスしながら賑やかに農作業をしている。このような様子を見た近隣の農家は「今まで1人で孤独に農業をしていたが、自分ももう少し頑張ろうと思えてくる。」と話す。
- ・農産物の販売先は、個人、ビジネスホテル、飲食店、介護施設など。ベーグルは当施設で販売。地域の人たちに買いに来てもらうことで、利用者がベーグルの説明や代金の計算に携わるため、コミュニケーションを図ることができる。
- ・イベントで市外に出向くことも多く、利用者は、自分たちで作った農産物やベーグルのセールスポイントをお客に伝えた時の反応から、丹波篠山のブランド力を感じることができる。

今後の展望等

- ・オリジナル商品を開発し、アイテム数を増やして収益率を上げ、利用者の工賃を上げたい。
- ・昨年から農地面積を10a増やしたが、今後の規模拡大については、利用者の様子を見ながら慎重に見極めたい。
- ・気軽に地域の人たちが集まる交流の場として、身近に農福連携を感じてもらい「たすきファームに行くと元気になるわ～」と言われるような事業所にして、農福連携のすそ野を広げたい。